





西山公第三

明治十九年
八月 點 查 章

愛知県文化会館
33.7.30 和
36268

A280
7
19

甚く減少し成之校の以授む少世少港も一由不
成り少量坊も不と召速に成江戸中少人
誰とも此分テあり少し 西山公第三

一 西山公徳所の初少物并金銀少及い少の是物
何少も西山公徳所不と成り但少書物少成りの中
細條少と成りて数多の書物少世少少成り

一 西公の隠居後中川の上より所松にて西公の
 事と云ふの志を以て川に所松を以て退る所
 所松は西公の通りし所なり 西公を以て所松に
 在りし所松は彼所松の西公の隠居とて
 西公の通りし所松は彼所松の西公の隠居とて
 西公の通りし所松は彼所松の西公の隠居とて
 西公の通りし所松は彼所松の西公の隠居とて

一 西公の隠居の後七十の所年堂の所松成り
 西公の隠居の後七十の所年堂の所松成り
 西公の隠居の後七十の所年堂の所松成り
 西公の隠居の後七十の所年堂の所松成り
 西公の隠居の後七十の所年堂の所松成り
 西公の隠居の後七十の所年堂の所松成り
 西公の隠居の後七十の所年堂の所松成り
 西公の隠居の後七十の所年堂の所松成り

海政徳川
 大正十一年

字と云能條公のよきとくまきと在 西山公通の成歴
の生より四法此の各各と後此の意を成る十年十二
卯亥の卯時卯時さうり 卯留立と成

の卯上ケル

同賦松契遐年詩一首

正四位下右道衛權少將源朝臣

吉字

亭々清又秀

松樹玉庭中

壽色千年緑

仰高君子風

右の卯時を卯家士の中より卯化仕ふ言教と

和 一 西山公は仰むる言教
仕 一 西山公は仰むる言教

一 能條公十卯亥の卯 西山公卯時より卯卯卯時

賀賢息九成 初度

西山

始仕富春秋官途挹大猷初名長不朽
人世久難留勿謂顔回短矣為彭祖壽
我聞仁者壽何願亦何求

一 西山公卯時後公より黄金綉帶ふけ卯卯の

度毎ふ所達夜の四方或は侍長ふりあつたれ
しつゝふ成

一 西山公常々武を成りし世より我事武を向は
して武藝の事をして武を武家の道な
るは進めばとも志士嗜む事事して早向ふ人
人の好まらる事しては留人の人たるは武を成
せしと思ふ事なる事向の世に武を成りしは仰は
西山公儒長才ふ五經の内一人の一人と仰は
味深長の才を程密におぼれはれよとの思ふ也

一 西山公先年儒者ふ木髪と仰はれし君は常々
儒と名ふハ儒者として名はれ世として儒者
と名ふハ或は木髪或は刺髪は世に流せし
石と無むしは木髪と仰はれはれしは木髪
字文の道は魚精といひは 公儀より武を成る
事與所なる事儒者醫者陸陽師といふ事
ゆゑに儒者といは君長才ふ儒者といふ事ゆゑに
字義事といふ事と仰はれしは上は木髪陸陽師の
武道といふ事と仰はれしは 儒者といふ事と仰はれし

中事の至り無散する者よ於て仕置成事として
由公の存止り成り又右末より婚姻の者の事
二月より水河ひせとて若きとき成事を成
其形よお立寄と成り或は過出路に於て形よ
畧事成り水河の事よ果は大方は論と成り
放埒成事よ有るは婚姻の人の成り成事よ
その形有る成り 西出と成り成り成り
と成り成り成り成り成り成り成り成り
日本國中より水河の事よ成り成り

一 西山の家臣中山風新の七十の養を成り成り成り
人見下成り七十の養を成り成り成り成り成り
縁成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り

一 世よ成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り

等ありてこれ等も奈指を居てむせり
物して世に言ふ事と此の浪小波一ありて
心改まるいふ事なり

一 西公の題云の年以病中小馬傷依る意は通を
外に氣の上浪註は去る不浪は付首世に汁海に
いふことありこれ様ふが波は注しててはさるる浪ふ
飯と人つくとし物を入浪ありてと云汁一色
のこ振に能分汁と語たまは度處は皆れおま
賞味とてさる下世の事何のものともいふべし

一 言ひたれも無不入り雨長たれは信約の及
なり浪士及び百姓兩人きて答へおまの言旨
度と云はれ中浪を事とてさる治世なる也
有り答はれを去る浪ふことて甚難難と波は
おまの言ふ事大波曲浪信西山その
言が考ありの汁海とて
真は言ふ方も浪ふ無ははゆる自然と城小
及び浪内ふ事なりまじ事難波振廻はさる事
ありて思ふ中浪は四言の浪は浪のこしと
海と浪のちの浪ふ三合の浪小 西山公の病中

うを授けし事もなし。此道云と成りぬ。汁海一教も
 興り成りし時念院より住持を渡りし中
 一 西山公の移りの名を正村（名を正村）とて西山公
 念院（名を正村）の家より移居せぬ
 ありし其の度不将村常布の毫の二幅對の別
 物と申す所の度ふ心誠法師の自書自傳の
 無地と名あり。西山公念院（名を正村）一書云云と
 上ふが者傳に信をすふ念の事。運成とて繪の
 書也ふや。その人の位をみて此書（名を正村）

一 寛文三年 西山公の信内の深淵二十八年除き
 の寸尺細より教の序ありて、弟云一の中
 成り海能のうらな御社を心僧處遊し
 神祇の名をも 友佐法師まゝより信行の五年
 新地の寺院九百九十七、深淵三百六十の僧の
 破戒をも心僧一と成りて百世より古海の
 度寺も皆僧道員與波と成り且より紀傳を撰と成り
 梅本村久昌寺へ、京改布志寺の僧を日隆と成り

波丸中河内村飛宮隆盛八僧正以信事これ
 水戸吉田郡葉王隆は僧正良達事これ其取
唐師入寺八惠以院隆盛和師事
 天竺より大唯國の僧正心誠経師住職せよ或は
 隆盛志願成を法戒法衣成也成を法衣成
 是より一願學英才出家を願成也よりより
 是より一西谷心藏小我心小心八心新心近心家心よりより
 一 本朝より古き碑より下野國那須の玉造の碑

取取心部心滿心
津津心六心社
 不心と心存心す心ま心が心 後心も心今心迄心流心し心傳心し心
 の心智心より心一心は心事心に心類心し心て心後心に心ひ心て心西心家心土心住心
 則心三心郎心宗心信心と心書心す心れ心也心と心書心す心甚心と心造心す心や心碑心と
 少心安心と心書心す心田心富心の心附心の心依心内心の心馬心江心村心大心法心院心と心云心
 山心伏心と心別心南心少心と心云心

一 武列は戸栗の水と云ふ 大樹堂聖堂心道心
 此心は心少心の心法心久心右心り心書心物心を心納心め心成心り心九心十心と心云心
 唐心土心の心書心を心納心め心中心西心山心と心云心日本心紀心續心目心録心
 文德心實心錄心三心代心宮心錄心古心事心記心四心事心記心右心の心上心部心の

書と謬と正一俗字と正字と味と成也一_一書宮後
付_一心_一の_一納_一と_一成_一

一 西山菅隠居後一度江戸へ上り菅原善房の蔵り
以て菅原蔵り_一新江都稲田の社と云ふ名を以て
此社を神倉帳やと載て_一その_一社_一の_一由_一と_一傳_一ふ
菅原蔵成_一の_一傳_一成_一の_一事_一やと_一神_一と_一菅_一と_一正_一と_一正_一
何_一の_一心_一存_一の_一願_一志_一成_一修_一の_一有_一て_一神_一通_一を_一以_一て_一
中_一と_一て_一別_一と_一菅_一と_一正_一と_一正_一と_一家_一士_一津_一田_一兵_一衛_一信_一實_一の_一子_一と
と_一成_一と_一後_一日_一月_一の_一幢_一と_一菅_一と_一正_一と_一を_一以_一て_一神_一倉_一と_一傳_一ふ

天下泰平 將軍家御壽命と所祈と遊い

一 西山公の家士菅原左衛門常菅相模の清集と見

風ふる常小部 菅原侍十右衛門松樹と見

少侍より多し 天竺原と見 菅原と見 菅原と見

菅原と見 菅原と見 菅原と見 菅原と見

僚と見 菅原と見 菅原と見 菅原と見

因僚詩と見 菅原と見 菅原と見 菅原と見

白沙黄金化出菊叢化微臣把得籠中滿豈若一

經遺在家と菅原公の少侍と見 菅原と見 菅原と見

九日侍宴同賦菊
散一叢金應制

不是秋江鍊

彼詩卷の少流一也歌夫の歳元常の事一也也
雅の事と云ふ事と作依て以自天神氣道
経此のト繪と遊これ將望表外ト作可也新
を成く流と勸僧寺のト主心新と成少許沙
花家の韻の心侍と流不持ト作表の結構不
ト作也 西小少と遊和成と遊也

菊潭吉元常頃目求得菅右相畫像九月廿
九日展軸設宴各堂次沙花家韻以賦菅公
把菊云云

源梅里

公如猿雀雜蟲沙希有人中優鉢花

晚節德高菅氏菊流芳藏在子常家

侍臣も追和成と作分也侍成て翠園水戸城
西小少

三言世少より成と成多と成て翠園と少許也
上人君子也と云一少少の成と年獨板と成分
と云雅言

小て右の繪像と云歌本新薦と云成也香燭染

酒を備へて茶り成れし後元常と右の畫像と

は下り重なり有栖川幸仁親王懷紙小

よまより先候也内をを身人

極く花事へ應れむと云

少休秋と花——はを且にそそくも大友陸言節
親重石尾の波ち氏信桃原の野竹の屋本貞
幹木ト云言井ト云徳木の鳴儒族と云

西山公の追和と次奉うれぬ

一 季姫君一とせましく少飲少飲其ふて暑きと
は後ぬり坐 西山公閑居早速夜無と三ツツ丸
若七少飲の間少てまふせ夕ひし涼風吹世
吹入候と杖の少くく少て忽とをいそと飲れ

世とて主人言その、ワツツの病案又を己安来
の若下の方一いむ事と不願榮耀とて怒
事と波と甚は徳ひは来ぬ

一 或は江戸小石川の屋敷のわあはつ見せられぬと云
り不不愛大少てせまき不不愛ある事と云
西山公人として其味を見せぬゆゑ大少て其の
しく皆くそ名を初り 西山公少飲は其を
洵河一名務始ていふ言うと云れぬ

一 南蠻人或年を云賦——はと云火と吟中の人

一 或者心木の屑ふとよけは世に胡椒の本と
 抄ゆとの希く小有ふ中より少くハ 西山公は
 胡椒山椒の種多し一或は毒多しあり或は毒
 なきも有は味くく用少く一椒の類の中ふむと
 今一少くハ波牙小辛味多し成り果を登り事
 有りしと存は

一 西山公は俗に黄乳と一石胡乳とよ又藤乳とよ
 け此穢多し今一佛前(玉指)と一

一 西山公昔より禽獸草木の類近を田ふなき物
 とて唐古より所取果は成り日本の内にも一國ふ
 有て世にふなき物とて一國より一國(所極)
 一 古来少く内少く牧畜をよ 西山公は野藪を村
 小産物に所産物を所見多し成り一程を馬を多し
 以枝は魚獵人少く杖持方少く根の用心は存は
 丈より一程多し 草木 大樹公(御秋上)

西山公は西山公は
 詳なり今も存す

一 成り又常陸に少くハ海冬白臭昆布海標魁蚌の類

ふき下ふ白糸の千四洞波浦ふき世海螺魁
蚌と武列より山形高良布の石舟山と松本より
山形高良津法政河陸淡の殺してより 初々白糸
海軍良布を今も愛用する國ふき世の海螺
魁蚌も 匠く出来し又常陸の海不幹の舟より
有と之も風味草クサ又武列より山形高
良の殺と殺より 今も 松本 松本 松本 又
山形川より 量と山形高良津某國の池の殺と殺
と後年、波下ふおひ言と大きく光りし

今も在る少く又山形内は漆猪狛多く山形を
漆紙留留の用之ツりきり中々と思はれりヤウ
つともし上りては雑多は山形國にて主なるトク外
西山わねの八捕山にて此部 土民お枝と成は
又木橙橙文柳竹 松の皮皮麦稗稗系浪草宮屠
ホサテ 野木成成くも世又野木山形田畑の道及寺
社社の赤木並木と植せし野木野木の山形赤木無ふ松
枝楓桂椿或は桑の木と植せし山形又暖國を好
り葉木とて八仔是後河安房上穂とくは山

わしとて今世お見立申は地を思は
西山公常と後とて會歎草履申の扱まで
世後後一とて申すは教事全身の爲ふ
あつた日本のがと申すはとて存は

一

西山公月雅なる事今世お希なる御事
之行路をとりておん南ふ南て小幡城
引とておの世還の傍に多敷の松を三年存の
とてふ雨の晴間もかく雨り者ふは程のりて
ふあつた雨申の存一入ふとてとて

遠くは彼方へとて改ひ家内同家内とて
秋とて御して御白の海は西山より此方とて
お十七里有り^{そと後}道は^{通の傍}多敷とて
よひは^{通の傍}三年間ふ路もかゝる世後
心をも親しくなされは皆おふとて
とて城は^新御傳の秘伝も心わけて
皆一思はく光ゆむとて芝蓮法師の叢
人の命ふ雨の晴間を御物とて
也の聖成爲て言の傳を御ひのひとて

異ありとしくとも情はたき事何ぞうらひしよと
公卿殿上人と云ふをもちて必定感必とて
物のみし書はせし思ふやあ日所隠
座の傍
昔と終ふふ事云詞符獨ふも成の持しよと
既して大體と云村家世帯と成を思ふが
言と云つことと詳あるが 西山公事思ふ事
武列ふ石川の思ふ人とを世に保健と
作られ今宵は地成の三々の朝の着る
と云ふ事よ思ふ事入せしと云ふの

板面公事半ふ大津村と成を多成千妻の終ふ
心むりしよいまは思ふこれと民家の思ふ事
武列と思ふ事と下と手しと成の卯の別
ふ石川の思ふ事ふ先と成とと國信と成保健と
思ふ事と入せしと思ふ事と成保健と成
中の思ふ事と成保健と成

一
明暦三年丁酉五月武列江戸大火にて思ふ事
焼失と思ふ年の五月乃乃思ふ事

おまひく事思ふのありて江戸の家をけし思

漸く火と通れりて行田舎ふまひりて之を修
らる年の陽年

光國

おのほくくくらのまふまふ
／＼也見ん

をより着し一筆所初り也

一
とくありて推し一筆所推し却て面白きふふ
水戸城外神宮と云ふ存存時より数寄と推し
友より時福り此業と友より年月と返る
老翁より兼屋三歩 齡既ふ八旬不修より起居三叶ハ

されり世事小昔不替り人の事樂と云
西山公彼修年と少百及り或所定迄然りて
やとて人城て案内とせやひ取て此之の
家は茶室を以て藁紙成客も過すも多由
き程の住居なりは増して数寄屋と云相作
屋き力とありは只屋以内形よりとりて
志つてひかひとまゝにりて世の家なりは
以供の者も皆備の外も留りて肉ハ少く位二
三人のこまりぬ彼老翁足と補りたる人の

少木少ていそりて其礼ふと座一ト（兼ていそりて）
後とて少少日て少少一と（兼ていそりて）三歳を家
推子のたてくるとめくがて少葉をさうりたる
兼入乃おまやうなると少少成路を少少成
也と名を少少成くはりて少少一と（兼ていそりて）
かこのめくりりり少の成少之の有少少と極少と
少ととも少少の成少と少少りり成りり也少と
少と（兼ていそりて）少城の八年少少人少と少少
良を一少山中少極の老樹二少有少少これ少好

事の者を下花少の少紅を少少少深山少谷少も
少少入少水少く少少少事少れ少も少極を誰
い少少の少少りり少或は少の少生の少 西山少山少
少少入少少少りり初て少花を少少少一少少少
少一少極二少極と少少少を少少少一少人
少少少少を少りて少少少少少少一少の少少
少少の少（少少少）少少少少少少の少少少少乃
少少少少の少少少少少少の少少少少少少
少少少少りり少少少少少の少少少少少少

事にて初種中名月と稱するは即ち七月
十五の中秋也又此月の月色と稱する或は
きく黄せんふま早きものなり以て洛城の蘇子
の赤染のふふ紅の度へ一昔をもよひて
又或奇ふ

あまれもあの人まやまはかしくん

こころの秋の秋乃夕くれ

とよふ秋の思ふかき言せは秋の秋
は夕とよふ雲のふふきて心は秋の人世を

更ふ情の情もあはれを秋の秋の秋の秋
即ち一いつ七月十五日を中於秋の秋の秋
世とよふ名月と名一は秋の秋の秋の秋
以てか毎年秋の秋の秋を秋の秋の秋の秋
以て秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋
一は秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋
即ち一いつ七月十五日を中於秋の秋の秋
世とよふ名月と名一は秋の秋の秋の秋
以てか毎年秋の秋の秋を秋の秋の秋の秋
以て秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋
一は秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋
即ち一いつ七月十五日を中於秋の秋の秋
世とよふ名月と名一は秋の秋の秋の秋

飯よ追舟の供養一山 西山公の馬子も存れ
河沿の宮も興成僅一山 額田 久遠の形も存れ
と云ふ事て此供の者も河沿も内 妙堂焼火寺
寺も河沿或西山 八境も寺も此遊子れ西山
の宮の御成也

一 昔双河郡大能と云ふ山ありて一山ありて南風
甚危りり此山管 上 山守も此山を
作れり物も山家ありて此山守
吳中へ食物 と 常も山守と云物と云と食も

家と云物も白米も寺も寺り 飯も 求也又此
松のて 寺も寺も 云物と云物も此山守
と云一山守中 此山守
の者も寺も寺も却て此山守の山守
蔵の御成も寺も寺も 妙堂焼火寺
少 此山守 寺も寺も此山守の山守
土民も寺も寺も寺も寺も 妙堂焼火寺
楳嶺と云山守 此山守 妙堂焼火寺
何り山守 此山守 妙堂焼火寺

山崩し草まれば多く明松の枝を散水
元城邊に及ぶ流石の内移りか道もふ徳
者の往きを以て止し八葉快飛りも入る七弦ひは
昔夏の末日光印宗 宗純正
法親王 武列後河川の
川莊ひ光を歳終り空谷懸日する教子の
蓮花不幄とく川上より流すせの流文を
とて印門ひ光との外無きそひひ

一 武列石川の形の後樂園とく 石川の
瀬原公の代ふ 大樹公後の學宗 宗を爲せ

うけよ付山谷懸のよの作せは古堂も花
廣くして松の心抱好有り遠せ理もよ流して
本立部り岩苔む 漱ふ涼山迷谷のゆき見ふ
有也此代よは水音も自然と任列業別を以
花と見ゆる習も忘れて四時よふ夜も往後
かく絶縁もつとふ 西山古堂と捨路の流か
させもよましく 神のまきく事ひの之を乃
入はまし神在ふ門とて 後樂園の二言と明の
辭水不書りて額ふり者もせり 西山古堂

寛仁の心容量の一人と樂を同くし心
小也物友とのふても心を一見せし二誰と
なり心見せし酒肴を携来り心園を捨り去
年々春夏秋をふりてたる誠心書を
初て是心をも心世界の思ひとてしるす
事都されし心園と後樂園と皆心友人の
樂々天々も後まで樂の心なり

一 水戸城き不仙徒^たく池の湖心も心之新様を此
ありとも心不徒あり^{八十}世澄心行心之多しれ

空天小本法都一行人暑も苦しまん心之思も又
心量心の為小西湖の蘇堤より心之^{あり}あり
楊柳と心^{あり}心柱を柳の堤と心存付心なり
心之夏口の暑も心も柳連つ法臨友堤小
心之心之^{あり}心多々四時の景色又又又又城を心
の青社小小心も心之^{あり}心地お心之樹木心柱心
或を心之園心之^{あり}心と文字心之^{あり}心
心之改心之^{あり}心存の心之^{あり}心心之^{あり}心
西山の心之^{あり}心心之^{あり}心心之^{あり}心心之^{あり}心

以て蕭々不志まきり一在りと云若生蔵り此門
 橋にまきりつゝまきり表の方より此竹垣
 一重のこゝろにて外に山ふつきは園といふ物を
 一重になり山初一の岩根より水がこぼりしる
 聲がはははくをそよ浮世の舟も洗ふ下
 の水は夜も池なり紅白の蓮を植へては
 彼方の君子の心をむすべしと云ふはの窓の糸
 かけ橋と桂一名玉蘭とを植へて西山の山口白坂を
 以て不志民が少く有てを小徑とてて

桃黒桃をいふ事三種類にて
 流石葉橋を名を桃原橋と号し強よ小徑の
 由り少く重柳と云樹皮は移り此初一の山を康と
 以故に彼康 西山云は山道なり此屋を其蔵也
 此門内少く鶴二丹以放きまは彼能と
 西山云下くありきなりつとて山ありハ書き方
 小南りしても忽一劍入飛来りしと山初一の池
 ありしは白塔一つとてくをきりて後人山道
 此屋敷の内よまきり植ひは切 西山云は住り此山

者の家伝よりかこの谷も有るは成見後に
人家が甚富寧く西山は住り西山は南
宮を以て壽命と名付させ給ひされ、若くは
より心老後ふりまて四時を極うけく少くても
まねく、の何れを見通し一紙に於て多岐
の難の程思ひやうもく、又西山常々
仰られ昔歎基中納言との程思ひ
しと、我を此所の身罪をりて涙のまき
りありと云ふ

一 西山公編集或は新撰或は増補或は後世の多
き小冊蔵書と云ふ種又或は他板蔵書或は在来
秘して世に稀なる書も書写及板行傳せしむ
之書も日本史記禮曲之類恒禮
臨時古巻懸装
調卷の
秘蔵の類
本と思ふなり右の外凡六十餘冊有る也と云
ひるなり、本書少残りて贅せん

一 西山公一代の内遊詩文集并歌歌ともて過去
の後保徳公の集の都合二十卷の事と云ふは
常山文集 二十卷

常山文集 二十卷

常山歌集 十卷

上石附子をあらしし又良材珍樵ハ純鋼ニ上ホト
西山芳々像を彫りし如路ノ銅像ハ綿密ニ吟
味を遂げし丹誠ヲ披くニ日不其像成リ
誠ニハ誠ニ 西山公所再其故より上旦ハ疑ハ
日古跡をみるも少り少人ニ其如シハ楓橋本村
久學寺の寺内ニ唐像ハ坐室ニ建立シ汝汝像
其安置ト成ニ是後生 西山公の如ク云ト云ク
知りしより其如ク思フ人々ハ南出遊了ニ熱
又ノ脚面相ハ容只ト云フニ人々ハ彼古

訪テ彼善像を御一奉ト云フ也

西山公揚祥巨像令神皇正統の初年ニ條
ノ後位ニ在レリ

今度愚意ハ成テナク其類一云ノルハ
貞今ノ後某と名ト云ノ者ハ進ニ思フ故ノ者ハ
其ノ忠臣義士ト云ハ孤某ハ其意通シ其海ニ
亦ハ復代出長長ト云ハ其ノ如クハ其如ク
志美ト云ハ其ノ某ハ悲憤ヲ成ニ成推業ト
第ニ其異世伝事ハ其ノ類ハ其化分御
者ト云ハ心巧所出ト云ハ其ノ如ク其ノ如ク

虚を以て言悔ひ破るハ遊興と好ハ飲少してを
自中の振舞ハ流舞方小たうきハ飲己ハ威
格と春ハ飲疎云々ハ月ハ飲苦耐ハ酒ハ飲實
臣ハ酒ハ名優人ハ近江幸ハ飲又通疎ハ飲
武備と志也ハ飲家臣百姓ハ酒ハ多クハ憐愍
ハ飲皇國の器物ハ瓶ハ酒ハ金銀ハ費ハ酒ハ此
事ハ酒ハ正ハ人ハ力ハ放ハ酒ハ振ハ飲自ハ小
教養ハ分ハ此ハ外ハ思ハ以ハ奇ハ飲ハ酒ハ對
新ハ飲ハ書ハ又ハ古ハ書ハ少ハ飲ハ酒ハ此ハ飲ハ

秘ハ酒ハ後事ハ酒ハ對ハ此ハ酒ハ此ハ酒ハ此ハ
少ハ延ハ酒ハ此ハ酒ハ此ハ酒ハ此ハ酒ハ此ハ
一 酒ハ此ハ此ハ

一 凡家中ハ士ハ不撰ハ後ハ後ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ
暫ハ酒ハ此ハ人ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ
不ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ
此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ
此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ
此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ
此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ
此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ

名利の心深しやまき之より人の心を奪はしむる書
の務と取扱ふに文字をかり古事の際を愛せし
人など何れも己ふむを白助と改む才智をよぶ
文を譽もよぶに能くは能くは能く見せしむる
心部して偏ふ器人の振舞ふゆえにこそは
群むその人なれ方りゆへに外に或は侍又は
或は書籍を服ひて流ふ世と流り世をよむ
是れ一向應ふはたふて何れも事
ま向ふと人なり道と人なむてふを

おまけにけりて偏ふ禽獸の根をけりて根を
根をけりて怒用成敗の心けりて根をけりて
法に心のおまけとして何れも事なりし
是れも心と改む心と改む心と改む心と改む
賢人君子やも及ひ又を人の心と改む心と改む
聖人君子も道と改む先学向ひて改む心と改む
学向ひて改む心と改む心と改む心と改む
心と改む心と改む心と改む心と改む
心と改む心と改む心と改む心と改む

只吾族書ふ及字。事ふては

一家中一士常一懈。其義を著し言ひ一言
一以も士の道不於て不舎儀成りて一以義
義の著し一以只偽言を以て其心
其心て外飾を以て法礼を以て義を以て上
不倫を以て慢を以て己の約法を以て人の患難を
不其理甲斐なし。及極其度。初も下り有の縁
初極其度。初も下り有の縁
初方一少と己の事。事ふせし。死場を以

一豆之不一。常小義理を重し。て其心。欲名の如
其心。又溫和慈を以て物の事を知り。人小信
有を以て義に。士より平生人感なき。うり
とり。或送りたり。誠ふ。古人のいふ。研生と。及
死しては。いふ。や

一士を右より。由義義と嗜人。柄負信小。人。世法
の如く。立居振舞ふ。何法。中。て。相立。想。愛。少。り
士。小。難。中。事。小。女。主。不。苦。得。か。苗。代。士。多。人。主
負。信。小。事。怒。小。苦。苗。り。さ。う。り。日。世。法。中。さ。う

立居振舞不見苦ゆ丸己の才智不河^くして自
慢談一災信成志^を還^く切^之と身^下してそ
ろ格^は序^成ま^るく^は内^到老^切して根^子
静^ふ重^澄ひ^は人^柄不^作一^も有^し又^は巧^者
一^の氣^不足^也も^もま^るく^は宗^色に^替り^也も
皆^同類^の人^として^は格^し人^才智^のの^ころ^に血
氣^少て^しま^るく^は縱^不骨^も多^く成^さる^べく^は居^れば
ま^るく^は内^才少^しけ^て根^を前^に持^てて^は夫^れ故^に毎^日
人^柄の^根も^足ら^ずとも^も不^可得^人と^{して}一^滴才^義

理^と骨^の心^がい^はれ^たう^も臨^ては^は必^ずの^控在^を見
合^せ忠^實の^志も^義之^の少^し一^命と^捨て^て後^復
の^用も^不中^に成^り不^得も^も其^の家^長も^も
少^し無^の事^もも^も計^大小^の教^の妨^を固^心の^才
五^貫の^骨凡^在少^しも^も持^重ふ^らぬ^文を^世に^差挿^と
和^一一^の内^にも^も災^柔弱^すて^は才^智も^不く^礼
法^も不^得云^れ不^得す^事を^疑ひ^て根^無酒
宴^少る^を過^る事^もも^も是^を不^得も^も悪^人柄^と
取^違ひ^せる^人より^も八^倍も^も其^の及^教を

彼も一木の因一更して廿五年の人の以ひ小
似はつて中うとをむねの

一 家中の士別して社権邊とを印とてとくは
文王は鑑養と云へりて物成志のて三川のめ
とも悔り終らぬとて天と云うとて物成めひて
聖人をしてたゞませともひたすも一てまがひ不
の志の成りの物成志を悔り心もたすは計ふま
何事も成り事、その目的は合ふて半紙の分
われまゝと云へりて可なりと云ふも終りて

己の事義と云ひて事と成り人の悔りも種
成るも不見苦數成りて一と云ふの義人として
すめりて一語りす何程位列遠ひても或
代りなくと成りてその用は一徳も成
得るべきはひらきとはともがらむては涙と興
ひらきても一方の人を人を知る方とてその本
意も是れ己の供也り多きもその世替は成る振
出りて小成りとも云へりて事、その成りたるの
成り大成就者なりと云ひて、一と云ふも

あつたるをいひも聞えはし辰は別して家光既
分の志を外影中の歴々下有る得候也

一 苗代寺 風俗始終未だ未だ一業未だ分り外を
備り身は鏡不持命は我回列又去下事の志を
對して二人入言位ふは經以備不備甲乙未
の二も見えなき事及はる根ふに及取部は余
不苦苦方淑淑少くは是も士の非信ふ叶ひする
少ていひむは士は分限する方とていひて法
事の法を言遠化して容を信ひ方と備候心か

いしや布意なきは信少用公は磯勢士去ても事と
いふ必討面一も發洗ひ相くし中前長心と
いふ發上振り會ははるおの事と波園を此の
天子成王乃叔父とて天下の掬政とて於てせ
ども勢治忘れく形ふのいふも成言遠非本據也
分りてそりて成也か一の右書と持くは位の
神と故まは備ふ丹の中れ雖ふては昔より初後
とも昔後く見く位と能敷か去ふつら振ふ
むつらりては振ふる振舞也や昔の事長る者な

法より言違取上借ひがまはよとと故に

一昔孔子の門人子游魯の武城の事と成りぬ

孔子よき人成りぬるも君のしれぬと庭對

りよるに漢書滅明と云ふは政理と云ふ必也及

よりして道通と云ふ公用と云ふれと終る事

家よる事と云ふ是乃よき人なりとや其の

風俗大形也よは是或く後世とも世ありて

漢書滅明の心高西故大根なりと其の使と云ふ

才是と云ふと世にともまわく人論論不辭也

今時を治めよふといひ漢成振舞の根よ下り又

人の治とて下り成者我方公用と外日也云々

いり不使と云ふ思交ふと子游の門の事と云ふ

と云ふ稱免生ふと子游の公成心の程と云ふ

と云ふて下りて下り治養也と云ふ根よ初り

と云ふ根の依々何違と云ふと云ふ根中より

其論論と讀ゆてけ洲と云ふて大方感法と云ふ

其の家臣と云ふ考名家光と云ふ子游と云ふ

法士と云ふ感心と云ふ中より下りて下り

既分ちる名の方へ音内音用なるを美りりの礼
法とてして之が名家老既分ちる名を一氣として
追復せしむ人心附肝要を何れか御目も親親
者より自分此志を允す其代りて人と思ひ
此良之親縁の指すく之の平生の行を考て
善惡を定むる名家老既分ちる名を復しては名を
依拠具員ハ士族在位して之を以て第一正派
の位方とて之を志後を金銀財物にて之を以て
一苗代とて其合とす及ぶ多しハ實に其不潔哉

正一くハ王爺もなきものといふ但世稱言ふ
有り又夫人の尊の色也哉或は群むと或は主款
三味線府上ハ其離ハ族と有るは吾東ハ一として
士の位法とて之は御下^福の吾合とて之を
文ハ礼法也一云ハ其も味先を主人
多しと古書の世人とて義理乃物徳を以て其行
能細もその事も神を敬し其行を奉^其ま
ねてその列々心あき及ぶ其行を奉^其ま
お解く其行を控りて之を内にも其行を

此法往々差別可有之は中士の要合
也若右に將下有之

一 家中に武備之意ヲ教武備とし勿限意
の人馬を武用之道^道を可將成射法
法の技術も亦兼肉を平に極意は
之邊の師に技をの外修程中
之用を武用^武の法を軍法を常々
之を平に但軍中法合用定意を平
生に技^存後之戰場に極く
言矣意程不^不を意得

一 武備成志進中キ平生乃者亦ては乃解小
安く不^不後^後生^生志^志を^を心^心得^得有^有之^之也
我^我之^之武^武備^備志^志を^を成^成之^之也
若^若右^右事^事も亦^亦不^不可^可得^得之^之也
之^之を^を武^武備^備志^志を^を成^成之^之也
還^還而^而志^志乃^乃成^成之^之也
志^志を^を成^成之^之也
和^和不^不少^少の^の成^成之^之也
汝^汝之^之志^志を^を成^成之^之也

血氣を中りし事少くして一旦血氣を
下^福落すと疾も習ふに増して士の死也と云ふ
事其宛期までも取仕はるる心の如く御も
せまらざる事幸一際いふ事なく能く
士の宛期の下^福落と違ひ下りて少くも大形或は
小なりし生血氣ふと云ふ事用なく
一 父母兄弟妻子不没死去は其葬送は法在の
重人の定むる事いとも今急不難は仍舊
宜に申す如し

一 父母兄弟親族お死去の長喪後の月致重人の
代して父母も三年の外兄弟親族も其
法有らば其の家法に由る事一統不重人の法に
喪後お節り候不没後也とも其又急不難は仍
其法に由る事いとも今急不難は仍舊
外の喪も古法に由る事いとも其又急不難は仍舊
一 孫重下候の外は父母も五十日兄弟親族
も俗令より定むる事いとも今急不難は仍舊
節承り候事いとも今急不難は仍舊

こも必聲と長く泣くが、引引籠居る内、酒
と不飲、女色小魚、け歌書め、心とふけて、相も徳
便少波、いれ就中、父母の喪、二代のたのみそり
と、思ひが、いそむ、母を父母を、骨肉と命、程に
も、我方の如來、即して、い、た、我方よりも
大切、成役も、い、難報の内、を、縁も、不、推、存、在、
う、い、く、叔長の後、二六、時中、忘り、降も、意、次
と、不、念、ひ、成、志、を、春、山、よりも、い、く、陰、阿、り、も
消、く、ま、る、難、れ、い、り、十、方、と、い、ひ、法、の、お、持、只

一、筋、の、い、が、い、ふ、心、腸、を、傷、到、衰、する、程、不、憂、(身)り
歳、年、月、の、い、よ、も、名、残、惜、愛、を、止、め、い、く、あ、れ、は、不
苗、代、の、風、俗、を、知、る、哀、傷、の、形、色、を、い、く、い、く、程、色
も、い、ふ、家、は、父、母、の、い、う、い、お、忘、れ、い、く、己、の、氣、持、を、振、也
ま、つ、の、い、ま、の、い、よ、之、離、合、よ、故、に、消、く、歌、く、者、を
見、い、く、生、信、の、証、據、事、の、振、り、か、け、振、り、成、り、來、り、
弱、き、い、く、武、士、の、法、の、あ、り、い、く、女、童、部、の、い、く、識、り、後、逸
ま、思、い、く、も、程、も、い、ふ、是、非、を、い、く、風、俗、歌、き、て、も、情、り
ま、り、い、く、今、及、遠、所、の、内、も、い、く、抱、り、志、深、き、い、く、の

夫も父母も慈悲の心で用ゝ濟れぬ
事なにも慈悲の心での入るも難忘の事な
りまゝにや父母もまめ様の教を授けても
つて思ひやうも父母の情解り得ずて
滅ふ友も友も一服の毒を飲まぬに
は右子も右の心慈徳思ひ情を感ずるも
思ひぬ思ふも難む人小童の心とて
實業及ひ下りてまゝに又武士が
修へ親打せざるも打むるも
修へ

心弱は武士の法よわく
言ふても是程の事よき哀
君は忍人様思ふへ
武士は法よわく
右に難左右の如く成
誰の先づ程程き者
何れも同ふも
因果の一向歎く

きん 今平生志業を以て心の程も亦似たり
了き事 小い

一 自今以後父母兄弟妻子以外親族の内法と
有る罪科を以て能く承知して親友を以
て中絶して仕法を教習せしむ又一門の
行は平生明く心中取違の内外之中か
ら後を文回し不致る但左様な國法を肯く不
忠の志を以て徳 是才業を以て罪を免れ
は後不致りて根を以て罪科 少くは以て差支ぬ

逆を巧み致し能く何とそ國の法を以て成り某大
事も成程の儀を以て少くは稱某も思ひ更
見のり 是を以て不可成り後を某のり 其も
不友若乃了皆を以てし 是を以て成りも子とて
父とす 然るに因ふ不致る君父の義理のまじ
り 何れも若くは切なく忠孝海闊 一とす
少くは事のおやう 此の首尾を以てし 其
者の科 罪を以て成り 一とす 難くは 父
子兄弟を以てし 是を以て 罪人 是を以て 其も 根を以て 是を以て

しそ某の為中付重^五之在士に風儀在振の仕方、
恩愛の物て其の心成各々の義理を^レ礼^レ心^レ曲^レ
しては某一人小忠良を被也と、人男くも某小
有通しては各乃義理を^レ遠^レく^レ礼^レ心^レ曲^レ一^レ某^レ
於て^レ海^レ重^レ也

一 家中に士常^レ寄合科理内^レ定意の通一^レ計
一 某丈も成即^レ、儀お不^レ成^レる^レ儀^レ各^レ言^レ儀^レ物
各合^レよも^レ何^レも^レい^レさ^レの^レ操^レ操^レも^レ及^レず^レも^レ
事^レも^レ士^レ寄合進^レひ^レを^レ進^レ不^レ親^レと^レ求^レね^レば^レ

の(吳先生も剛く^レ濟^レり^レ歴^レも^レ多^レし^レ池^レ毛^レ上^レ亭
之乃社^レ家^レ洞^レと^レ言^レひ^レを^レそ^レか^レを^レと^レ池^レ毛^レ上^レ
下^レの^レ苗^レ代^レ池^レ毛^レ上^レ科^レ理^レ各^レ度^レ乃^レ物^レを^レ求^レね^レ
心^レ成^レ一^レ操^レ費^レ一^レと^レい^レは^レ乃^レ者^レ也^レ雅^レ心^レ成^レ
此^レ某^レ以^レ形^レ或^レ會^レの^レ買^レ不^レ平^レの^レ宜^レ也^レ時^レり^レ某^レ也^レ
少^レ也^レを^レと^レり^レか^レも^レ、^レ某^レ密^レの^レな^レす^レと^レう^レと^レせ^レ
禮^レ不^レ又^レ使^レま^レり^レて^レ若^レ志^レ岳^レ振^レの^レす^レむ^レと^レい^レふ^レ也^レ也^レ也^レ
不^レれ^レを^レ某^レ振^レ振^レも^レ、^レ疾^レと^レあり^レ、^レく^レ不^レえ^レく^レ某^レ也^レ
肉^レの^レま^レく^レ少^レく^レま^レり^レり^レり^レ、^レ少^レ澁^レ子^レ某^レ江^レは^レて

よておは酒を搦之んこまり〜れずる
なり者〜をいれんをまりぬん〜ぬ
屋き物ぬら〜り〜も裁の法〜り〜ら
紙端〜〜〜り〜り〜程不盡不乃柳不
古卷よ味嗜の少〜り〜を思ひて是を
求む〜〜〜り〜事〜り〜ん〜
快致誠を〜具不〜れ〜り〜と〜の志好
つも〜不喜のせい時頼〜〜天下の執権成
少〜〜不喜のせい振舞

是を〜事也〜
の人〜
付〜
下稿〜
持〜
か〜
二〜
思〜
〜

達乃文りハ品礼法を教へて去るもそのついで
親の如くも美度も何の物も堂前の水鏡も
いふは事意を託すといふ物も何を託してまは推量
するに存するれどもいふは物も何れも出ても
此の風俗能くも作法の正敷くも何れぬ之の教
の流るる事自身も之を教へて去るも其の去る
此を教へて去るも何れぬ之の教の流るる事
思へく去るも其の去るも何れぬ之の教の流るる
事也

さりとて其のいふはりも其の去るも其の去るも
其の去るも其の去るも其の去るも其の去るも

一 家中に土俗羅と云可馬武器を刀刀と
用ふ事と方上とはは極は是も城程羅と云はは極
常神の衣裳の衣を託して其の去るも其の去るも
其の去るも其の去るも其の去るも其の去るも
或は別紙に定むる也

一 家々作りの品は畢竟風俗の品也其の去るも
又藤原朝の品は其の去るも其の去るも其の去るも

小松別荘にて

一 衣食住は武吉馬を武々園に寄せて不什
相しては外常不用し。益相小松別荘も園小
五相まよて信濃成相東京も又そのまよて一三
益乃相用意不仕はてもまよて一三以掛約業
久業入乃乾多新相して何の用もまよて候不
也世も交分句のひもまよて一三若候は候とも
夫も一向不痛のひ小松の心相して方まよて候
一家中の士情の續きは相不詰りも限も意不致し

新納り分量で候りして今限乃まよて一三不減
故一尤も若又親族も食之病まよて候又一
他人もても親戚も之候内不迷惑候まよて一三
まよて候は候も偏して自分端の何れ候も
奇物も致候は候も不不致して候も能くも士
而もまよて一三右一此之候も不候も相
承也歳度も信濃も一三候も外も不承も不仕合
まよて候も相一三此又相別して候も不
お候も相一三此分の志候も承知は自然

有指之徳を遂に成す事なりて可達下り
延引ははるるを中へ

一 古より四民として天下の人を士農工商の四なりと
分け並べし事なり而して職と勤と事なり
然る農は耕作と勤と米穀を出一六様通
なりて室屋と稱し或は陶冶と成く器物を作り
高に賣買といふ事と通し世に民は
天下の用と云ふは相義理なり物一ツは
士職と定りし事なり相義理なり物をも

奥もなき物なり故に彼之民の可成は事なり此意
度より人と定めし事なり而して相義理なり
此義理の由目天りし事なり人十層能乃ん
なりなり互にお勤する事なり相義理なり
而して相義理なり父と父せし君と君と
大礼なり及ぶ事なり而して相義理なり
義理を守りて彼之民の可成は事なり
然るめて在りし事なり而して相義理なり
而して相義理なり而して相義理なり

不乃其意を存せし後交商代士して他を利
欲せず者より深く金銀を貪り商人未だ對し
柄は地を揮掃る事なき或は馬を好む或は
道具を數計り紳士たる者一時的利を以て懸念
を去る者あり西貢仙樂乃は形中く是を以て
金銀を不為し又支障なくして之を以て根已
爲すて皆中して人不能る事あり然るに流り
自ら身掃く振舞者多く自ら掃く人未だ不
利害との二動亦必し其義理の方寸心より此

物少くは利すとも害すとも是を以て中を以て
一節ふんずる事なくは人の中より義理の立
中より其義理不捷き者も利欲不疎く利
欲不捷き者も義理よくして義理よくする者
也利欲ふんずる事なく西貢仙樂也
利欲なき事あり一向うけらば其事しては其
義理不疎く其義理不捷き者も利欲の多し
いりませしして膠く振舞せ人未だ其意を
常に涵養する事なくして其意を以て其

又石を捨てて三毫を折り秤を腰にも其
こすし士のさゆゆくをなすし四人の不和は皆
かして昔公儀休より去るは仕一時事家
の菜園より茶を食てもゆき茶を以て節の
植一葉を採く採り又家之穢一布の汚を
見く撒撒一衣を追ひ一穢を去りしは
ちんねの衣も衣を脱ぎしはまた又の業も皆
人爲りて利を以て生るを世人は之を
之を魯國の執控ともはるが如く利を食

者も下民と利を以てするは誠ある
と今某家長乃面より日來又よく其愈の福を
おのまきて國中の百姓何人も能知す意は後
さへ極ふしむるは利欲の志を極度極
りしに而も百姓何人も對して御所を振
舞ひて公儀休もむきとるは利欲の
委實穿鑿の故に思く利欲は時を
恨みつきは利欲已にすなりと水も利欲
しては利欲の事を振ひひては利欲

と云くもると云は義理を思ひ行ふと云の上
して、二毫堂のくみひしては、一丸畢亮君子小人
王霸治乱のさうひも是よりおれは、六事と千室
のあやまりも、誠の中にも、依り義利の辨を
先賢も、委成淑論を、行り、是を肝要のり、小
沙は、一と云は、各三書と、後く、二反、三と、云
は、以て、其、又、二、又、事、長、く、皆、今、後、と、云、は、小
と、者、留、三

稽徳編卷之十九終

